

『説文解字』祖本への接近（上）

——小篆の字形を中心として——

高 久 由 美

An Approach to the Original Text of "Shuo-wen Jie-zi", Part I

——Focussing on Small-Seal Scripts in the Texts——

Yumi Takaku

目次

1. はじめに
2. 唐抄本『説文解字』の現状
3. 小篆の字形の検討（以上、本集）
4. 現存考古遺物所見の漢魏六朝篆書資料と『説文解字』篆文の連続性（以下、次集）
5. おわりに

1. はじめに

1-1. 問題の所在

古文字研究における『説文解字』（以下『説文』）の位置付けは、秦系文字の集大成という点にあらう。西周金文の伝統的な流れを汲み、東周時代の秦の地域において用いられた、一般に秦系文字と称される地方的特徴を有する文字体系が、統一秦の時代に、始皇帝によって全国共通の文字として指定され、この後の中国で正統書体として用いられるようになる。後漢に至って許慎により『説文』が編まれたことによって、秦系文字の集大成が完成した。ただ、現行本『説文』が漢代のままの姿を留めているとは考え難く、それが如何なる傳承の結果現在に至ったのかその現状を正確に把握し、その祖本がいかなるものであったかに些かなりとも接近す

ることは、古文字研究において一定の意味を持つことであり、また秦系文字研究の基礎作業としても重要な意味をもつと考えられよう。

1-2. 接近の方法

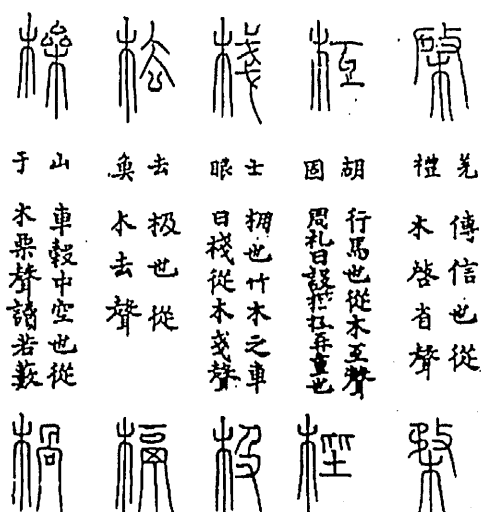
祖本への接近方法は三段階に分けて進めていくこととする。

まず、第一段階では、現存する唐抄本の整理、それ以降の説文との連続性・非連続性を明らかにする。第二段階では、許慎と同時代の篆書資料と現行本『説文』との関連を明らかにする。第三段階では漢以降、つまり『説文』完成以降の篆書資料と、統一秦の篆書資料との間の連続性の確認を試みる。こうして浮かび上がった『説文』成立以降の篆書の現状をも視野に入れることによって、春秋戦国時代から、統一秦により文字統一されるまでの秦系文字の通時的变化を明らかにすることが可能となるはずである。

2. 唐抄本『説文解字』の現状

2-1. 木部殘簡について

木部の抄本は、もと安徽省黟県の県令・張仁法の所蔵品であったものを、同治二年（1863年）莫友芝が入手したとされる。翌年、莫氏の『唐

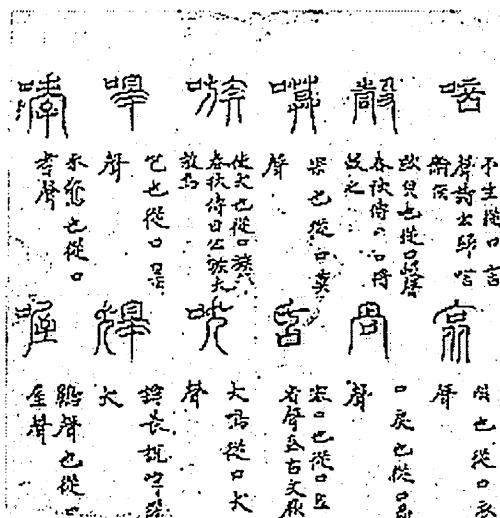


山 車轂中空也從
木 乘聲讀若藪
去 極也從
木 去聲
士 棚也竹木之車
日 棧從木或聲
固 行馬也從木至聲
周 札目謹持耳重也
先 傳信也從
木 啓省聲
禮 木啓省聲
于 木乘聲讀若藪
木 乘聲讀若藪
日 棧從木或聲
木 乘聲讀若藪
木 乘聲讀若藪
木 乘聲讀若藪

▲圖1



圖2 ▶



▲圖3



◀ 圖4

寫本『説文解字木部箋異』が上梓されたことによって世にひろく知られる所となった。後、抄本は端方の手を経て、1925年、内藤湖南の蔵するところとなり、内藤氏の死後、現在は大阪市の杏雨書屋(財団法人・武田科学振興財団)に所蔵されている¹(図1)。木部抄本は全部で六紙あり、計186字の小篆を収める²。𠂔・恒・榧の三字が闕筆となっていることから、書写年代は穆宗(821～824)以降の時代と考えられている³。

先行研究としては、前述の莫友芝『唐寫本説文解字木部箋異』があり、木部殘簡全文の摹本が収録されるとともに、主として唐抄本と大徐本・小徐本との異同が検討されている。そして、この研究に基づいて、周祖謨は「唐本説文與説文舊音」⁴の中で、唐本と李陽冰刊定説文との関係、唐抄本と大徐本・小徐本との異同及び得失、及びこれらの反切の音系について論じている。よって、木部については、二氏の研究をベースとしながら、そこでは論究されていない小篆の字形、字形と説解との整合性という点から、唐抄本をその他の資料との対比によって検討することが可能である⁵。

2-2. 口部殘簡について

唐抄本口部は従来二種類の抄本が知られていた。一つは、平子尚氏蔵本で、一紙に二行三段の界格があり、六字を収める。最下段は、小篆のみを残して説解の部分が切り取られている(図2)⁶。もう一つは、西川寧氏蔵本とされるもので、これは一紙に六行二段の界格があり、十二字を収める(図3)⁷。

しかるに昨年11月、東京で行われた古典籍展観下見会に唐抄本説文殘簡と思われる一紙が出陳されているのが突如発見された。これは平子氏蔵本と同じく一紙に二行三段の界格があり、六字を収めている(図4)⁸。学界への紹介は、この小文が初めてのことであろう。

平子氏蔵本と東京古典会出陳本は、いずれも二行三段に六字あり最下段の小篆に付された説

解の部分が切除されているという、全く同様の体裁であるが、これら二紙の文字の配列を『説文解字』大徐本(孫氏一篆一行本)と比較すると以下ようになる。

平子氏本

𠂔	叱
0876	0873
𠂔	𠂔
0871	0874
𠂔	𠂔
0877	0875

東京古典会出陳本

𠂔	𠂔
0866	0863
𠂔	𠂔
0867	0864
𠂔	𠂔
0868	0865

*文字の配列の検討に際しての便のため、表中の四桁の番号は、お茶の水大学説文会によって編まれた『加番説文解字』(1991年)に付された番号を利用させていただいた。

西川寧氏蔵本は、本来一行三篆であったものの下一段が切り取られたもので、本来は以下の様な面目であったことが推定される(点線部分が切除部分と推定される)。

𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
0914	0912	0909	0907	0904	0901
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
0915	0912	0910	0908	0905	0902
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
0916	0913	0911	0908	0906	0903

これらは、文字の結體や反切の体裁、一行三篆という形式から、同一本から出た殘簡と考えてよいであろう。書写年代については、唐代の日本人の摹本であると考えられている⁹。

2-3. 木部と口部の関係について

木部との違いの一つは、木部が一行に二篆という体裁であるのに対して、口部は一行三篆の体裁という、文字の採録方法という点である。

もう一つの違いは反切の記入方法である。木部の反切が別枠を設けて付されているのに対して、口部の反切は説解枠の文末に朱筆で書かれている¹⁰。

次に、各殘簡の文字の配列を唐抄本と大徐本の間で比較してみよう。

口部の文字の配列は、2-2 で表記した通り、平子氏本の「𠂔」を除いて、宋代の『説文』と一致している。

木部の文字の配列については、口部と比して異同が多い。先行研究では、異同がある場合唐抄本と宋代の『説文』のいずれが正しいかという点を中心に考察が行われている。𣎵、𣎵、𣎵、𣎵等の文字は、文字の異同を比較すると、唐抄本の方が正しいとされる例である¹¹。こうした部分的な異同はあるものの、全体としては唐抄本の字序が宋代に継承されていたのではないかと想像しうる。

また、字形の比較という意味で二種類の抄本の小篆を、その共通する文字構成要素によって比較してみると、

	木部	口部	大徐本
盍 059			
	3577	0867	3577
𠂔 116			
	3635	0876	3635
夾 141			
	3658	0866	3658
𠂔 092			
	3613	0868	3613
𠂔 124			
	3642	0905	3642

盍、𠂔の例からは、篆書のスタイルが明らかに宋本とは異なった共通する特徴をもつことがわかるであろう。これは唐代の時代的特徴と考えられまいだろうか。また、夾、𠂔、𠂔の例からは、木部と口部では、木部の方が宋代の篆書に類似していることがわかるであろう。

上述の考察から、これらが別本から出た残簡であることがわかる。と同時に、これら唐抄本『説文』に共通する形式というものが、「表形

式」であり、現行本とはかなり隔たった体裁であることもはっきりする。古文や或体などの重文は、一字につき一枠で採録されているのも唐抄本の特徴と言える。そして、時折齟齬が生じるものの、宋本は概ね唐抄本の字序や説解を踏襲している。宋代の傳寫や李陽冰による妄改の影響で現行『説文』に生じた誤りを、唐抄本によって相当訂正することが可能であるとするのが従来の研究者の一致した見解である。

3. 小篆の字形の検討

3-1. 唐代までの許学の概況と李陽冰について
『崇文總目』には唐代の許学に関する著述として、

刊定説文解字二十卷 李陽冰刊定
説文字源一卷 李陽冰撰
字源偏傍小説三卷 林罕撰

の三書が挙げられるが、『字源偏傍小説』を除いて現在は伝わっていない¹²。

李陽冰自身に関しては、正史には傳がないが、『述書賦』『宣和書譜』『續書斷』等の書論に事績が詳述されている¹³。開元年間(713～741)に生まれ、卒年は貞元年間(785～804)である。『説文』を刊定したのは大暦年間(766～779)とされるので、唐抄本殘簡よりも早い時期に成立していたことになる。では、李陽冰刊定説文と唐抄本殘簡の間にはどのような関係があったのだろうか。李陽冰刊定説文解字とはいかなるものであったか、(1)『説文』大徐本・小徐本中に散見する李陽冰の字説の引用、(2)徐鉉の説文解字詁妄篇(繫傳第三十六卷)などの資料に依って間接的にその姿を窺うことが可能である。これらの資料から、李氏の説文学の内容をかいま見ることができるわけであるが、李陽冰に対する、徐鉉、徐錯の共通した評価は、李陽冰による校訂の段階で旧来の説が斥けられ『説文』本来の姿が著しく改竄されたことに対する批判である¹⁴。徐鉉や徐錯の仕事にはこうした妄改を本来の姿に糾すという面があったことも念頭に置いておくべきであろう。

次に、李氏の小篆については唐宋の書論において様々な評価がなされているが、それと、小篆の書法に関しての、玉箸体と懸針体というチームがいかに関結しているかを見ておこう。なぜなら、玉箸体と懸針体は、いずれも篆書の一スタイルを指すものであるが、従来、唐抄本木部殘簡と李陽冰刊定『説文』を区別するための一根據とされてきたからでもある¹⁵。

玉箸体は玉筋体とも書かれ、唐の舒元興撰と伝えられる『玉筋篆志』に「秦丞相斯[李斯]、變倉頡縮文爲玉箸篆…當時議書者皆輸伏之…無有出其右者。…受之以趙郡李氏子陽冰。陽冰生皇唐開元天子時」（『全唐文』卷七十七）とあることから、李斯の篆書、つまり泰山刻石や瑯邪台刻石の篆書を指して言うものと想像されるが¹⁶、『玉筋篆志』には玉筋篆そのものを挙げて解説しているわけではない。そしてこのスタイルは時代が下って李陽冰に継承されているとされる。李陽冰イコール玉箸体の書き手とされる文獻的根拠はここにあると言ってよいだろう。

次に、懸針体については、唐の唐玄度『十體書』に「後漢章帝建初秘書郎曹喜所造」（『墨池編』所引）とあることから、後漢の曹喜の創作した書体とされたことがわかる。そして、曹喜の書の系譜については、衛恒の『四體書勢』に、「秦時李斯號爲工篆、諸山及銅人銘皆斯書也。漢建初[76～83]中扶風曹喜少異於斯、而亦稱善。邯鄲淳師焉、略究其妙」とあることから、後漢時代に李斯とは異なった書風の曹喜が現れ、それが邯鄲淳へと受け継がれる。魏の三體石經の書丹者は邯鄲淳と考えられていることから、三體石經の小篆イコール懸針体と考えられるようになったようである。北齊の蕭子良『古今篆隸文體』や、少々時代は下るが、『篆隸三十二體金剛般若波羅密教』などには、実際に懸針体と称する書体が具体例として残っている¹⁷。唐抄本『説文』殘簡の篆書はこの懸針体であるとされているのである。

以上のことから、李陽冰刊定『説文』と唐抄本『説文』殘簡は、玉箸体と懸針体という別種

の書体で書かれた『説文』ということになる。だからといって相互に無関係ということではなく、「城隍廟碑」「三墳記」等、少なからず残っている李陽冰の刻石の篆書を唐抄本殘簡及び現行本『説文』と対比することによって、唐代『説文』の有様を検証することが可能である¹⁸。

3-2. 文献資料からの検証—『篆隸萬象名義』の篆書を利用して

『説文』校訂の一つの手段として、唐宋の類書や音義、箋注等の文献資料に引用された『説文』の利用が従来行われてきた。しかし、いずれも説解部分のみが引用されるだけで、字形を検証する手掛かりとはできない。ただ、字形については、『五經文字』や『干祿字書』に引用された楷書の字形が参照可能であるとされるが、このことは唐代の“正字の学”と大いに関連しているといえよう¹⁹。こうした資料の中で、小篆の字形を留めるもの、つまり、小篆の字形を検証しうる材料となるものは、僅かで、釋空海『篆隸萬象名義』、郭忠恕『汗簡』などがあるにすぎない。ここでは、『篆隸萬象名義』の小篆を用いて、上記の唐抄本との関連を比較してみよう。

『篆隸萬象名義』は、原本『玉篇』にもとづき、空海によって削抄加篆され、撰せられたとされる²⁰。しかし、「篆隸」二體の名称を書名に冠していながら、実際に篆書と楷書が併記されているのは、全編中で、

第一卷 一、上、示、二、三、玉、珏、土、
垚、里、田

第二卷 目、省、明、曷、見、覡、苜、耳、
口

第三卷 心

第四卷 木

第五卷 禾

第六卷 山

の二十四部に止まる²¹。木部は小篆が併記されているのは全体の五分の一余りに止まるため、唐抄本木部殘簡と重複する篆書部分がない。口

部は唐抄本との間で比較可能である。

まず、文字の配列について比較してみると、第二章で言及した如く、唐抄本と宋本の間で僅かな異同がある。宋本と異なる配列は口部では平子本第二行に見え、

「𦣻」(0876)→「𦣻」(0871)→「𦣻」(0877)とあるが、口部に関しては『篆隸萬象名義』の字序は唐抄本と一致している。また、文字の配列についてのみということであれば、篆書のない木部についても検証可能である。木部で唐抄本と宋本の間で異同がある、「𣎵」「𣎵」二字についてみてみると、

木部 057「𣎵」(3540)

唐抄本 𣎵(重3)𣎵 𣎵 𣎵 𣎵
3575 → 3540 → 3576 → 3577 → 3578
篆隸萬象名義 𣎵 𣎵 𣎵 𣎵 𣎵
3575 → 3540 → 3577 → 3576 → 3583

木部 119「𣎵」(3594)

唐抄本 𣎵 𣎵 𣎵 𣎵 𣎵
3636 → 3637 → 3594 → 3638 → 3639
篆隸萬象名義 唐抄本と同じ

「𣎵」に関しては唐抄本=『篆隸萬象名義』≠宋本であるが、「𣎵」のように、いずれも少しずつ食い違っている場合もある。このように、木部に関しては、唐抄本、『篆隸萬象名義』、宋本の間は、口部のように悉く一致しているわけではないことが知れよう。

次に、口部について、『篆隸萬象名義』と唐抄本の篆書を比較してみると、両者の間に共通する唐代特有の篆書のスタイルが存在することが知れる。

𦣻	𦣻	𦣻	𦣻
0864	東京古典会2	篆隸萬象名義	大徐本 小徐本
𦣻	𦣻	𦣻	𦣻
0876	平子氏本4	篆隸萬象名義	大徐本 小徐本
𦣻	𦣻	𦣻	𦣻
0875	平子氏本3	篆隸萬象名義	大徐本 小徐本

𦣻	𦣻	𦣻	𦣻
0877	平子氏本6	篆隸萬象名義	大徐本 小徐本
𦣻	𦣻	𦣻	𦣻
0901	百川氏本1	篆隸萬象名義	大徐本 小徐本
𦣻	𦣻	𦣻	𦣻
0902	西川氏本2	篆隸萬象名義	大徐本 小徐本
𦣻	𦣻	𦣻	𦣻
0905	百川氏本4	篆隸萬象名義	大徐本 小徐本
𦣻	𦣻	𦣻	𦣻
0909	百川氏本7	篆隸萬象名義	大徐本 小徐本
𦣻	𦣻	𦣻	𦣻
0912	百川氏本9	篆隸萬象名義	大徐本 小徐本

上記の例からわかるように、唐代の『説文』もしくはその流れを汲む篆書には、宋代の『説文』小篆とは明らかに異なる、時代的な特徴が存在していることがわかるだろう。次節では、上記の唐抄本と宋本の間で字形の変化が起きている場合、そこにいかなる文字学の問題が存在するかを考えてみる。

そして同時に、『篆隸萬象名義』には、スタイルは懸針体を真似ながらも字形的な誤りが相当含まれることも指摘できるのである。

𦣻	𦣻	𦣻
0863	東京古典会1	篆隸萬象名義
𦣻	𦣻	𦣻
0866	東京古典会4	篆隸萬象名義

篆書の字形だけでは判断し難いが、『篆隸萬象名義』では、併記された楷書が「𦣻」とあることから、隸定の段階での誤りとわかる。また、「𦣻」も楷書への隸定の際に「𦣻」とされることから同様の誤りであることがわかる。

上述のように部分的な誤りはあるものの、宋

代の『説文』の字形と比較して、両者の間の共通点は非常に多く、字形の面でも『篆隸萬象名義』から唐代の『説文』の姿を窺い知ることが可能である。次節では『説文』の唐抄本と宋本の違いを比較してみたい。

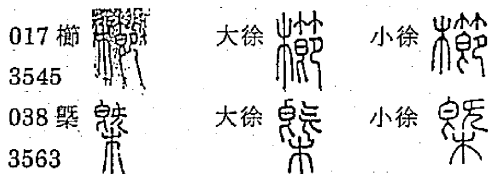
3-3. 唐代篆書資料と唐宋『説文』間の関係

まず、前節及び前々節で概要を記した二種の資料を用いて、唐抄本『説文』から宋代の『説文』への推移の間に、文字学的に如何なる問題が存在するかを検討してみることとする。唐抄本と宋本の間で字形上の変化が起こっている場合、それは、唐代の篆書のスタイルとして、李陽冰の石刻や『篆隸萬象名義』『汗簡』にも運動しているのだろうか。このことを、いくつかの文字構成要素に関して検討してみることとする。

(1) 唐代で二種類の字形が通行して、唐→宋間で今の形態に収斂された場合。

𠂔について

この構成要素が現れるのは、木部抄本 017「櫛」と木部抄本 038「槩」においてである。



「櫛」においては、唐抄本と大徐本・小徐本を比較すると、𠂔の下部の字形が異なっている。ところが、同じ構成要素であるはずの「𠂔」が、「槩」においては、宋本と同じに作られる。これと全く同じ構成要素「𠂔」の異体字を、李陽冰の石刻に見ることができる。



城隍廟碑



三墳記碑



滑臺新驛記

『説文』における𠂔についての字形的解釈を見てみると、『説文』五篇下𠂔部に、

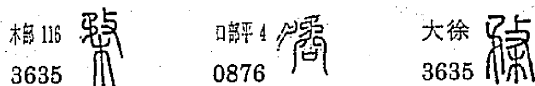
「𠂔，穀馨香也。象嘉穀在裹中之形。匕，所以扱之。或説𠂔一粒也。」

とある。白と匕を組合わせた小篆、そして説解における文字構成要素の説明からすれば、これを𠂔と作る宋代の『説文』の方に、字形と字解との整合性がある。しかし、東周金文におけるこの字形を遡ってみると、いずれも𠂔、𠂔のように作られており、唐抄本の小篆は、𠂔のより古い字形が遺されているものと言えるのである。しかしながら、一方で、この構成要素が同じ抄本である「槩」では、𠂔に作られるという内部矛盾もあるのだが、唐代の小篆に、古文字学的にはより伝統的な結體の文字が存在していること興味深い問題であり、看過してはならない事実である²²。

(2) 唐代の篆書→宋で字形が変化し、かつ、文字学的には宋代の字形が正しい場合。

矛について

この構成要素は、唐抄本では、木部(116 槩)と口部にあられる。大徐本と比べると、「矛」の字形に変化があることがわかるが、文字学的に正しいのは大徐本の方である。












この時代的特徴が、唐抄本同様、今は失われてしまった李陽冰刊定『説文』にも存在していたことが『説文』祛妄篇によってわかる。この字形がこのように変化した理由に関しては、『説文』祛妄篇は、矛字を「矛、説文首矛也。篆形陽冰作𠂔然無所説。臣錯以爲…陽冰所作𠂔本出𠂔賊字…因書矛戟之字與之同妄矣」と説明する。徐錯の理由付けは必ずしも正しいとはいえないが、彼が事実として指摘している李陽冰の篆書もまた、唐抄本や『篆隸萬象名義』と同じく、𠂔としていたという点は重要である。

(3) 唐代でも李陽冰だけが異なり、唐抄本や宋本では同じ字形である場合。

金について




金を構成要素として現れるのは、

021 鋳		大徐		小徐	
3548 或					
024 鈐		大徐		小徐	
3550 或					
045 鑿		大徐		小徐	
3568 古					

であり、唐抄本と、大徐本、小徐本いずれも字形が異なっている。李陽冰の篆書では、






三墳記碑

と作り、これだと、唐宋『説文』の 045 に近いようである。金についての『説文』における分析は「，从土左右注，象金在土中形，今聲。，古文金」である。045 鑿は鑿の古文であり、李陽冰の金も古文に近いようである。この字形は徐鍇が『説文解字繫傳』祛妄篇に李陽冰の説を引いて「金李陽冰云：當作金。許慎金體非」とあるのと呼応している。唐宋の『説文』は、字形が各本で異なっているが、これらの異同はいずれも説解でこの文字を「今聲」と分析していることに影響されて、文字の上体を「今」と作っていることによるのだろう。

(4) 唐抄本だけが異なっている場合。



唐抄本の小篆の中には、李陽冰とも宋本とも一致しない字形が存在する。これが、唐抄本の段階での変化かどうかは、下篇で先行する考古資料を用いて改めて検討することとして、ここでは、木部と口部から一例ずつ問題のある構成要素を挙げることにする。

「必」

088 秘				
3610		大徐本	小徐本	李陽冰 三墳記

「衣」

哀				
0902	西川氏本2	篆隸萬象名義	大徐本	小徐本
啐				
0877	平子氏本6	篆隸萬象名義	大徐本	小徐本

「啐」と「哀」はいずれも構成要素として「衣」を含んでいるため、これら二字の「衣」部分を比較すると、「衣」をと作るのは、唐抄本口部殘簡及び『篆隸萬象名義』について観察できる字形である。唐抄本口部殘簡及び『篆隸萬象名義』と、宋本の間には、明らかに「衣」の字形の相違があることがわかる。なお、李陽冰の篆書では、「衣」を構成要素とする文字である「卒」は（「栖先煙記」）に作り、やはり宋本同様であることも指摘しておく。

3-4. 小結

私見によれば、『説文』成立以降、『説文』で構成要素として規定された字形が、文字構成要素として機能し、宋の『説文』小篆などには、この説解の分析による小篆が広く採用されているように思われる。そして、これに先だって、唐の時代の篆書資料を『説文』と比較してみると、唐代には、必ずしも、『説文』の分析には従わない字形も通行していたことが検証できる。いわゆる“六朝碑別字”についての異体字研究における目的と、期せずして同様な経過を辿っているように思われる。こうした伝統的研究とアプローチの方法こそ異なれ、後漢の時代に『説文』という書物に集大成されたはずの小篆が、それ以前の字形がなおも継続して用いられ続け、唐代の篆書にまで遺っているということは、興味深い事実であり、看過してはならない文字学の問題であることを、再認識できたように思う。

〔注〕

- 1 民国年間に羅振玉によって影印本が刊行されている。また、『新修恭仁山莊善本書影』武田科学振興財団、1985 年にも書影が全文採録されている。図 1 は羅氏影印本に拠った。
- 2 莫友芝は一八八字と数えるが、これは、第二紙中間の爛折により失われている二字（文字の配列からおそらく鉛・榊であろう）も算入した字数である。残っている小篆の数としては一八六字というべきであろう。尚、本稿では木部小篆を一八六字とし、001 から 186 までの通し番号を付して示した。
- 3 小篆の特徴について、莫友芝は尹元凱「美原神泉詩」との類似を、周祖謨は翟令問「岵台銘」との類似をそれぞれ指摘するが、具体的な検討は行っていない。
- 4 『中央研究院歴史語言研究所集刊』第二〇巻上、1948 年；又『問學集』中華書局、1966 年。
- 5 字形について、周祖謨は、唐抄本と宋本に於ける字形上の違いを、以下の三点から説明する。(1) 音符の字形が異なる別體字として、杞、榊の二字を挙げる。これらの音符は宋本では己、隹に変化して、杞、隹となる(2) 篆書の書法が異なるとして杞字を挙げ、これを唐代一貫之寫法と説明している。(3) 組合せ方向が異なるとして、榮と檄、榮と榊を指摘するが、単に結體が異なるにすぎないとしている。また、字形とは別の意味で、文字構成上の解釈つまり六書の解釈に相違がある文字として、櫛、杓、杲、櫛、杓、昏などがあることも指摘される。
- 6 『汲古留真』所収。また、大矢透『古韻考』、頼惟勤『説文入門』大修館書店、1983 年にも書影が転載される。
- 7 倉田淳之介「説文展観餘録」『東方学報京都』第十册第一分、1939 年に初めて書影が載録される際は、九州某氏本とされた。当殘簡はその後西川寧氏の所蔵となり、『書道講座 ⑤篆刻』初版、二玄社、1972 年にも書影が載録される。
- 8 『古典籍下見展観大入札目録』東京古典会、1998 年。尚、『目録』ではタイトルを『篆隸字義』断簡とするが、『國書総目録』に依れば、書名に「篆隸」を冠する書物は空海の『篆隸萬象名義』以外になく、本簡が『篆隸萬象名義』でないこともまた明白である。これはおそらく、箱書きをした植村和堂氏が、本簡を空海『篆隸萬象名義』の殘簡と誤認した上、書名を錯覚したため生じた誤りであろう。筆者が、1998 年 11 月 14 日、東京神田の古書会館で催された東京古典会の入札会場で現物を実見したところによれば、墨書され、反切のみは朱書された、幅 53mm × 長 196mm の殘簡であり、既存の二紙と比較検討すれば、この三紙が元来は一連の写本の口部であったものが、このように切断されたものであることが判断されよう。おそらく当殘簡は新発見資料の唐抄本『説文』であることを指摘しておきたい(現蔵者については未詳である)。
- 9 周祖謨、注 4 前掲論文。
- 10 周祖謨は、このことを以て、口部の体裁が木部よりも古い体裁であると断じているが、少々牽強に過ぎよう。宋代の『説文』を見ても分かるように、反切を文末に付す方がむしろ口部の形式を踏襲したやり方であるとも言えよう。
- 11 周祖謨、注 4 前掲論文。
- 12 豊田穰「魏晉南北朝より唐代に於ける許學の流行について」『漢學會雜誌』第四卷第一號、1936 年。
- 13 李陽冰の傳及び書法に関しては、これら書論の記載や『集古錄目』『金石錄』などに収録された遺文、現存する碑陽の刻文をもとにした專論が多数あり、周祖謨「李陽冰篆書考」『問學集』、西川寧「李陽冰の篆書」『書品』第 195 号、1968 年、朱関田「李陽冰、李潮小議」『書譜』1980-1;『唐代書法考評』浙江人民美術出版社、1992 年、施安昌『唐代石刻篆文』紫禁城出版社、1987 年、朱関田「李陽冰散考」『唐代書法考評』浙江人民美術出版社、1992 年;『中国書法全集』榮寶齋、1996 年、同「李陽冰書法評傳」『中国書法全集』榮寶齋、1996 年等を参照されたい。
- 14 徐鉉の進校定説文解字表(『宋史』徐鉉傳)、徐鉉の『説文解字』祛妄篇(繁傳第三十六卷)。
- 15 周祖謨、注 4 前掲論文、また、頼惟勤注 6 前掲書もこのことを指摘する。
- 16 西川寧「漢篆について」『書品』第 222 号、1972

年でも、泰山刻石や琅琊台刻石を玉箸體の理想と評価している。

- 17 『隋書經籍志』には『古今篆隸雜字体』(一卷、蕭子良撰)と、『篆隸雜體書』(二卷)の二書が記録されるが兩書とも現在中国には伝わっておらず、『篆隸文體』の名で鎌倉期といわれる写本が山科の毘沙門堂にあり、これが蕭子良の『古今篆隸雜字体』とされる。



- 18 周祖謨注4前掲論文も、唐抄本と李陽冰の篆書を比較して、異なる点のみをいくつか挙げ、唐抄本が李陽冰判定『説文』ではないことの論拠としている。イコールではないにしても、今後は、これらがどういった経過で唐抄本と李陽冰の篆書に吸収され、どう宋本と関係していくのかということも視野に入れた考察が必要であろう。


- 19 施安昌『唐代正字學考』『故宮博物院院刊』1982-3(總17期)

- 20 本書は、巻首に「東大寺沙門第僧都空海撰」とあることから、空海が806年に帰国した後、大僧都の位にあった827年から835年の間の成立とされる。現存する『篆隸萬象名義』は、唯一高山寺所蔵の鳥羽永久二年(1114年)の傳寫本のみである。『篆隸萬象名義』と『説文解字』との間の関係については、『玉篇の研究』で知られる岡井慎吾氏の「篆隸萬象名義を看て」『藝文』第十九年第二号、周祖謨「論篆隸萬象名義」『問學集』所収があり、部首、字数、説解部分についての考証がなされている。しかし、字形に関しては、隸定された楷書を用いての文字の異同が議論されているだけで、小篆の字形についての論究はなされていない。

- 21 岡井慎吾「篆隸萬象名義を看て」『藝文』第十九年第二号は、現存するのが傳寫本であることから、原本には全部篆書と隸書が併記されていたが、転写の際に篆文を遺して楷のみに止め、後その遺した篆文を補おうとして各巻の初めに少しずつ記入したが遂に中絶してしまった本のみ伝わったので今日の形になったのだらうと推測する。

- 22 皂字については、拙稿「釋説—古文字研究における考古資料利用の試み」『論集 中国古代の文字と文化』(汲古書院、近刊)中に、甲骨文字から『説

文』小篆に至るまでの該字の変遷を考察した際は、宋本のみにより唐抄本を参照しなかったため、先秦時代にはであったのが、『説文』ではに作るということを結論とした。それは、説解の「象嘉穀在裏中之形。匕，所以扱之」と、皂を構成要素とする一連の文字からの結論でもある。しかしながら、今後は、こうした資料が違っていることも念頭において、古文字資料としての『説文』の扱い方を考えねばならないだろう。

尚、魏三體石經も皂をに作ることからすれば、魏三體石經小篆より取り込まれたとの推定も成り立ち得る。魏三體石經小篆については、次章で節を設けて詳論することとする。

挿図出典

図一 『唐写本説文解字』民国年間影印本

図二 頼惟勤『説文入門』大修館書店、1983年

図三 西川寧監修『書道講座 ⑤篆刻』初版、二玄社、1972年

図四 『古典籍下見展覧大入札目録』東京古典会、1998年。

【付記】

東京古典会に出陳された『説文』口部殘簡に関しては、松丸道雄先生並びに、宮崎洋一氏(広島文教女子大学助教授)、古勝隆一氏(京都大学人文科学研究所助手)から有益なご示唆ご教示を賜った。末尾ではあるが記して感謝の意を表したい。(本稿は平成十年度文部省科学研究費補助金・奨励研究(A)「新発見の秦代封泥の文字学的研究—“漢字形成史研究”のために—」による研究成果の一部である)